



堀口大學全集

5



堀口大學全集

堀口大學全集 5

昭和五十八年五月二十日印刷
昭和五十八年五月三十日發行

著者 堀口大學

發行者 長谷川郁夫

發行所 小澤書店

東京都千代田區富士見二丁目五十一番十二
電話(東京)二六三一九二八(代)

印刷 精興社

製本 大口製本

製函 日東工業

定價八五〇〇圓

一、本全集は、堀口大學の全業績を、詩、短歌、譯詩、評論、隨想、翻譯作品（小説・戯曲・評論・隨想）等の各分野に互って、原則として既刊の單行本を中心に編纂したものである。

*

一、本卷（第5卷）は評論・研究とし、著者唯一の長篇評論『ヴェルレエヌ研究』と、今回新たに編輯委員により編纂された『西歐詩人作家論』を採録した。

一、『ヴェルレエヌ研究』は、著者生前に都合三回に互って刊行されている（いずれも同紙型の流用に據る）が、本卷では最新刊の昭森社版を底本として使用した。

一、『西歐詩人作家論』（各翻譯書の解説文、及び雜誌等に發表されたものの中から編纂されたもの）は、各原著者の生年順に排列した。またこれらの中で隨想と判斷されたものは、第7卷に收録する（その詳細は本卷・解題を參照されたい）。

一、本卷本文の漢字假名遣等は、原則として底本通りとしたが、底本が新字舊假名遣のものは正字舊假名遣に、正字新假名遣のものは新字新假名遣に改めた。

一、正字舊假名遣使用の本文は、次のような場合に限って訂正した。

1 誤字・誤植と判斷されたもの。

〔例〕 偶然↓偶然、薄記↓簿記、潑刺↓潑刺、詫び言↓詫び言、等。

2 假名遣・ルビの誤り（但し、用ひる、及び音便に關する表記は底本通りとした）。

〔例〕 おどり↓をどり、しまう↓しまふ、報づる↓報ずる、身丈↓身丈、凡庸↓凡庸、等。

3 脱字、及び送り假名不足で不自然なもの。

〔例〕 こ（の）種の、餓（ゑ）て、失（は）れず、吸（つ）たり、等。

4 著者の訛用と判斷されたもの。

〔例〕有せない、↓有さない、虐しへげる、虐しへげると、異體のしれない、↓得體のしれない、等。

5 前後が轉倒したもの（但し、當時の慣用と判断されたものは底本通りとした）。

イ 訂正したもの。

〔例〕討檢↓檢討、傀儡↓傀儡、開展する↓展開する、現實する↓實現する、等。

ロ 底本通りとしたもの。

〔例〕徵象、争鬪、歸復、難有、等。

6 俗字、及びそれに類するもの（但し、同字と見做される場合は雙方を並用した）。

イ 正字に改めたもの。

〔例〕才↓歳、耻↓恥、鼓↓鼓、潤↓闊、涼↓涼、鬱↓鬱、隙↓隙、等。

ロ 雙方を並用したもの。

〔例〕回レ回、廻レ廻、蟲レ虫、絲レ糸、双レ雙、並レ並、秘レ秘、等。

一、次のような場合は底本通りとした。

1 底本刊行當時の一般的慣用と見做されるもので、誤字・誤植とは判断できない用法。

〔例〕紀念、常談、政事家、干興、荷擔、好愛家、無暗、音なし、ベツト、等。

2 同語の異書體。

〔例〕何所レ何處、欲レ慾、篇レ編、吃驚レ喫驚、佗レ佗レ詫、親切レ深切、等。

3 踊り字。

二、當時の一般的慣用と見做されるものの中でも、普遍性を缺くと判断されたものは訂正した。

〔例〕不似レ似ず、不拘レ拘らず、可笑レ笑しく、可笑レ笑しく、要レ之レ要之に、自レ自レ等。

一、外來語や外國の地名人名の片假名表記は、拗・促音を含め原則として底本通りとしたが、とりわけ同一本文

中の異表記に關しては、原則として頻度の多い方の表記に統一した。

〔例〕 ファムブウ↓フアンブウ、アルテユウル↓アルチユウル、コムミュン↓コンミュン、等。

一、判讀困難な外國地名等の漢字表記には、本文初出の箇所にもルビを付した。

〔例〕 白耳義ベルギイ↓白耳義ベルギイ、法フワン↓法フワン、海牙ヘアグ↓海牙ヘアグ、葡萄牙ポルトガル↓葡萄牙ポルトガル、等。

一、外國語の原綴は、原書のあるものは照合したが、明らかな綴りの誤植と思われるものを正すにとどめ、句讀點等については一切訂正しなかつた。校異・校註に記載のない箇所はすべて底本通りである。

一、本文中の「レ」、「ル」に關しては、書名のみ「レ」を使用し、他はすべて「ル」に統一した。またそれらが缺けている場合は補った。

一、疑問符・感嘆符の後は一字アキに統一した。

一、本文中の引用箇所（獨立したもの）は『ヴェルレエヌ研究』の底本が極めて不統一のため、左右一行アキ（引用は一字下り）に統一した。また『西歐詩人作家論』の場合は、《》が使用されている箇所をへゝに訂正したほかはすべて底本通りとした。

一、底本を訂正出来ない箇所、及び諸々の問題點は、本文の行の右側に〔註〕の記號を付し、校註に記した。

一、以上の處置により、本文と底本との間に異同を生じた場合は、すべて校異に摘記した。

一、卷末の解題には、すべての原著者に關する評論作品を一覽表にして、本卷本文に採録された作品との關連を明示した。

評論・研究

ヴェルレエヌ研究

西歐詩人作家論

443

作品細目

763

校異・校註

771

解題

793

堀口大學全集
5

評論・研究

ヴェルレーヌ研究

はしがき

本書の内容は、先に「ヴェルレエヌ」と題し、昭和二年「世界文學大綱」中の一冊として出版したことのあるものである。

いま重ねて之を世に問ふ所以は、先の「世界文學大綱」が、分賣を許さない豫約による小部数の出版だったのと、價もまた高かつた爲め、ひろく一般好事家の机上にゆきわたり得ない憾みがあつたに他ならない。この新版にあつては、前版の魯魚の誤を訂した^(註)ほか、卷末に詳細な索引を附して照合探索の便に供した。

昨今、佛蘭西に於いても、「詩人よ、ヴェルレエヌに還れ！」の聲のやうやく旺んならんとする時、この國の詩に關心ある精神人の一擧に供するを得ば幸甚である。

昭和八年三月

著者識

昭森社版のはしがき

本書は、先に一九二七年東方出版社から『ヴェルレエヌ』と題し、次いで一九三三年第一書房から『ヴェルレエヌ研究』と改題、それぞれ小部数の出版を見たものであるが、今度昭森社主人の切なる乞ひを容れ、ここに三たび江湖にまみえんとするものである。

著者がこの書の筆を執つた當時から、今日までの間にも、彼地に於けるヴェルレエヌの研究は歳と共に進み、重要な傳記論評も現はれてゐるが、今の自分には、それ等を咀嚼吟味して、本書を書き改める用意も餘裕も持ち合せないまま、それには何れ後日に機會を待つとして、ここには元のままの姿を新しい讀者の前に重ねてさらす事とした。諒とせられたい。

一九四八年初冬高田の假寓にて

著者識

第一章 生ひ立ち

ポオル・マリイ・ヴェルレエヌは、千八百四十四年三月三十日の午後九時に、メッツ市オオト・ピエエル街二番地に生れた。エスプラナアドの近くにある一軒の立派なブウルヂョア風の家がそれであつた。その家は今日まだ現存してゐる。

彼の父はニコラ・オオギユスト・ヴェルレエヌと云つて、工兵大尉であつた。白耳義^{ベルギイ}ベルトリスの生れで、當時四十六歳であつた。母はエリザ・ジュリイ・ジョセフ・ステファニイ・デエエと云ふ名で、パ・ド・カレ縣のフアンプウの産、當時三十二歳であつた。

ヴェルレエヌがメッツ市に生れたことは、實は偶然の結果に外ならなかつた。その頃、佛蘭西陸軍には工兵聯隊が三つあつて、メッツとアラスとモンペリエの

三市に置かれてゐた。父が工兵第二聯隊附を命ぜられてゐた時に彼が生れたので、彼はメッツ人となつたのであつたが、彼がアラス又はモンペリエで生れることも極めてあり得べきことであつたのである。かうして父の職務上の偶然が、ポオル・ヴェルレエヌをメッツ人となしたのであつた。

その後、人も知るやうに、普佛戰爭の結果、このオレエン州の市は獨乙に割讓せられて、約半世紀の間、佛蘭西人の獨乙に對する敵愾心の徵象となつた。ヴェルレエヌは偶然が與へたこの出生の市を、自分の魂の故郷として一生のあひだその愛惜の心を寄せてゐた。

今度の歐州大戰の結果として、アルザス・ロオレエン二州の回復と共に、メッツの市が、また再び佛蘭西へ歸復したことは、わがポオル・ヴェルレエヌの大きな悦びに相違ない。彼はいま頃墓石の下で、この快報を得て大いに喜んでゐるであらう。七十年戰爭の後で、獨乙の爲めに奪はれたこの市が、やがて再び今日のやうに、佛蘭西へ歸復するであらうことを、彼はその詩篇の中で豫言してゐる。獨乙人がこの市の上に、その

狂暴な國旗を掲げるのを見て、彼は次のやうに歌つてゐる。

○ Metz, non berceau fatidique,
Metz, violée et plus pudique,
Et plus pucelle que jamais,
○ ville, où riait mon enfance……

……Patiente encor, bonne ville!
On pense à toi, reste tranquille,
On pense à toi, rien ne se perd,
Ici, des hauts pensers de gloire,
Et des revanches de l'Histoire,
Et des sautes de victoire.
Médite à l'ombre de Fabert.
Patiente, ma bonne ville,
Nous serons mille contre mille,
Non plus un contre cent, bientôt!……

おおメッツよ、運命が定めた私の搖籃よ、
強姦されたメッツよ、貞操あるメッツよ、
さうして今までよりはなほ處女に残つたメッツよ、
其所に私の幼時がかつて笑つてゐた市よ……

やさしい市よ、暫く我慢せよ!

私たちはお前を思つてゐる、乞ふ心を安んぜよ。

私たちはお前を思つてゐる、何物も失はれはしない。

來れ、ほごらしき戰勝のよろこび、

來れ、歴史の復讐、

來れ、勝利の風向の急變。

市よ、お前が生んだ勇將

ファヴェルの思ひ出の影にあつて

靜かに思ひにふけれ。

我慢せよ、わがやさしい市よ、
やがてわれ等がなるであらう

百人に對する一人ではなしに

千人に對する千人に。

果然、詩人の豫言が、ヴェルサイユ條約によつて實現されたのであつた。

ヴェルレエヌは七歳になるまでメッツで育てられた。彼がこの市で生活したのは、ほんの幼時の極めてあどけない年月に過ぎなかつた。然し、彼の心は死ぬ日までメッツの市民として残つた。彼が如何にその誕生地たるこの市を愛したかは、彼がその作物の中で、如何に屢々この市について語ることを愛したかを見ても分る。殊に彼はその散文の中でこの市に就いて多くを語つてゐる。彼の『懺悔録 (Confessions)』の第一部は、殆ど全部メッツの思ひ出の爲めに費されてゐると云つてもよい位である。詩に於ても前に拔書きした「メッツに與ふる頌歌」が、如何に力強いそして男性的な愛國心によつて生氣づけられてゐるかを見るがよい。

ポオル・ヴェルレエヌと云ふ名を耳にしては、多くの人々は、破壊的な反國家的な詩想を抱いたデカダンの

詩人を想像する。然しこの詩人が如何に愛國者であつたかを思はうとはしない。この一事は詩人の爲めに惜む可き事である。彼も最良の一佛蘭西人のやうに、佛蘭西を愛した詩人であつたからである。彼は七十年戰爭の際には、すでに法律上の兵役義務を有さなかつたに拘らず、自ら國民軍に投じて包圍中の巴里の城砦を防がうと企ててゐる。次で千八百七十二年には、自分の出生地メッツが獨乙に割讓せられたにも拘らず、彼は佛國人たる國籍を繼續する正規の手續を果してゐる。彼は佛蘭西を熱愛するのあまり、今日の吾等から見れば、子供らしいと思はれるやうな偏見にさへ陥つてゐるのである。

Schopenhauer n'embête un peu,

Malgré son épicurisme,

Je ne comprends pas l'anarchisme,

Je ne fais pas d'Ibsen un dieu.

彼の快樂説にもかかはらず